

妙好人のことば

—信心とその利益—

白川晴顕

[010]

本願寺出版社

妙好人のことば―信心とその利益― 目次

第一章 妙好人とは 7

第二章 親鸞聖人における信心とその利益 15

他力信心と二種深信 17

信心の利益 24

憶念の心とは 26

転悪成善の益 31

念仏者は無碍の一道 38

求めなくても知らないうちに得られるすばらしい利益 46

正定聚の利益 61

第三章 妙好人における信心とその利益 71

大和の清九郎 73

讃岐の庄松 85

長州のお軽 97

因幡の源左 109

石見の才市 120

あとがき 144

『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』、『浄土真宗聖典 七祖篇―註釈版―』は『註釈版聖典（七祖篇）』と略記しております。

第一章 妙好人とは

妙好人みょうこうにんとは、何ともいえないほどたくいまれな麗しい人という意味で、特に浄土真宗の念仏者を讃えた言葉です。この言葉の語源は、釈尊が『観無量寿経』で「念仏者は、此人中の芬陀利華なり」と讃えられた内容を善導大師が『観経疏』「散善義」で注釈され、

もしよく相統あうとくして念仏ねんぶつするものは、この人はなほだ希有けううなりとなす、さらに物ものとしてもつてこれに方あたぶべきなし。ゆゑに分陀利ぶんだりを引ひきて喩たとへとなすことを明あかす。「分陀利ぶんだり」といふは、人中にんちゆうの好華こうけと名なづけ、また希有華けううけと名なづけ、また人中にんちゆうの上上じやうじやう華けと名なづけ、また人中にんちゆうの妙華みやうけと名なづく。この華相伝はなそうでんして蔡華さいけと名なづくるこれなり。もし念仏ねんぶつするものは、すなはち此人にんちゆう中の好人こうにんなり、人中にんちゆうの妙好人みやうこうにんなり、人中にんちゆうの上上人じやうじやうにんなり、人中にんちゆうの希有人けううにんなり、人中にんちゆうの最勝人さいしやうにんなり。

〔註釈版聖典（七祖篇）〕四九九～五〇〇頁

と述べられたところにあります。

親鸞聖人も「正信偈」に、

一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、仏、廣大勝解のひとのたまへり。この人を分陀利華と名づく。

(二切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願 仏言廣大勝解者 是人名分陀利華)

(『註釈版聖典』二〇四頁)

と述べて、信心を獲得した人を「廣大勝解」の勝れた智慧者と讃え、また「分陀利華」と名づく」と称賛されています。「分陀利華」とは「白蓮華」のことであり、別名「妙好華」とか「淤泥華」とも呼ばれます。そこから浄土真宗では信心を獲得した人を「妙好人」と称します。

多くの花は、花びらが散った後に花の元に実を付けますが、咲くと同時に花の中にすでに実を宿しているのが白蓮華です。しかも『入出二門偈』に、

淤泥華といふは、『經』(維摩經)に説いてのたまはく、高原の陸地には蓮を生ぜず。卑湿の淤泥に蓮華を生ずと。これは凡夫、煩惱の泥のうちにありて、仏の正覚の華を生ずるに喩ふるなり。

(『同』五四九頁)

と示されますように、清らかな高原ではなく湿った汚泥に根をおろし、汚泥を養分にして咲く白蓮華は、泥に染まらず純白の花を咲かせます。煩惱の汚泥の中にありながらも、それに惑わされることなく生死の迷いを超えた人、それは、すでに往生成仏することが定まった(実を宿す)人です。『浄土和讃』『大経讃』に、